

UIFA JAPON NEWSLETTER

■記念講演会 吉田文子さん

「あんなこと、こんなこと、あったかしら？」

第7回総会報告

■連続企画 広がるレースワーク

「いつの日か韓国で UIFA 国際会議を」シー・ファー・ペー

「鉛色の村—プロローグ」佐藤久美子

この指とまれ「喜多方押し掛けワークショップ」/役員会報告



■記念講演会 吉田文子さん

「あんなこと、こんなこと、あったかしら？」

—日本女性建築家のパイオニアが語る

建築という、ものづくりへの深い愛情—

大正・昭和・平成の3つの時代を生き、現在も建築家として現役で仕事をされている吉田文子さんに、女性建築家第1号として、これまでになされた仕事を中心にお話いただいた。

吉田さんが入学された早稲田大学付属早稲田工手学校建築科は、日本初の男女共学の建築学校であり、当時は様々な年齢や経歴の男性が建築を学んでいた。そのような学校に10代で、しかも女性として初めて入学した後の学校生活のエピソード。また、戦中は、就職された建築事務所で、男性が次々に戦争に召集された後、みんなが帰って来るまでは中核になって責任を担っていかれたこと。戦後の混乱期にあっては、建築を通して社会の建て直しをしていこうという使命感をもって仕事をされてきたこと。建築士会や学会でも女性の開拓者として活動されてきた経験から、「皆さんが活躍して、あちこちでできるようにならなきゃだめなんですよ」との激励の言葉をいただいた。



吉田設計事務所主催
日本建築学会・稲門
建築会第1回特別功
労賞受賞。1913生。

男社会の中に飛び込んでいかれたパイオニアとして、常に前向きにまた積極的に仕事に取り組みまれてこられた姿が、聴くものの心に克明に刻み込まれるお話であった。そこには、女性だからという気負いではなく、建築という、ものづくりの仕事への深い愛情と技術や知識に裏付けられたご自分の仕事への情熱と自信が、永年にわたって仕事を続けられてきた何よりの原動力であったことが伺われた。

■UIFA JAPON 1999年 第7回総会報告

日時：6月12日(土) 13:30~14:00

場所：弘済会館「桜」

出席者；31名 委任状；53名

昨年度1998年は、「UIFA 国際女性建築家会議第12回日本大会」が開催された記念の年であった。総会の冒頭、開会の挨拶として、中原会長より、第12回日本大会の成功と社会的な評価が高かったことは、会員の方々の協力と努力によるものであるという感謝のことが述べられた。その後、以下の議案について審議が行われ、いずれも原案通り可決承認された。

第1号議案 「1998年度活動報告」、「一般会計収支報告」、「特別会計収支報告」

第2号議案 「1999年度活動計画(案)」、「一般会計予算書(案)」、「特別会計予算書(案)」

続いて、松川実行委員長から、昨年度9月に行われた「UIFA 国際女性建築家会議第12回日本大会」の「会議開催内容報告」及び「収支報告」の報告が行われた。

(今村芳恵)

■連載企画

広がるレースワーク

—UIFA '98 のそれから—

大会が終わってはや10ヶ月——参加された人たちが、その後、会議での成果や思いをどのように膨らませているのでしょうか。今回からそれぞれの場での新たな展開について、日本から、世界から、幅広くご報告いただきます。



いつの日か韓国で UIFA 国際会議を

韓国 シー・ファー・ベー



韓国キョンウオン大学教授。日本大会では「環境保護の選択肢としての鉄骨住宅」のテーマで発表。環境保護と経済面から、韓国の将来の住宅供給において鉄骨構造の持つ可能性を指摘。

The 12th UIFA in Japan is thought to be a successful congress especially in the theme quite suitable to the era and in the systematic management mixing tradition in high-tech. UIFA grew much to be an adolescence through a childhood from the 11th congress.

First of all setting up theme was nice. A environment is the main subject and divided into three parts—man, architecture and city—. I saw quite bright prospect of UIFA Japon in that many young Japanese women architects participate in this congress.

Second, the study tour was appropriate to the main theme. Machi-zukuri and traditional building and park and specially final farewell party of traditional tea ceremony hosted by chairman, Nobuko was very impressive.

Third the Yokohama open symposium thought to be well arranged in being together with officer and citizen and UIFA. The place of the exhibition of private design work is beautiful and familiar to the general people, so a big exhibition effect could have gained, I thought.

But just one regrettable thing for myself was not to be able to participate in post congress tour.

Now, on writing an essay, I decide my mind to do my best to make another nice UIFA congress peculiar to Korea in a future.

Si Hwa Bae (Korea)

第12回UIFA日本大会は、テーマが非常に今日的である点、またハイテクと伝統がうまく混ざったシステムティックな運営という点で、特に成功した会議だと思えます。UIFAの第11回大会までを幼児期とするならば、第12回で青年に成長したといえるのではないのでしょうか。

まず、環境をメインテーマにおき、人・建築・都市という3つの分野に分けたテーマの設定がよかったと思います。大勢の日本の若い女性建築家が大会に参加している様子を見て、UIFA JAPONの明るい将来を感じました。

次にスタディ・ツアーですが、メインテーマにぴったりでした。「まちづくり」、伝統的な建物や公園、そして中原暢子会長主催のお茶会がとても印象に残りました。

第三に、横浜の公開シンポジウムは、役人と市民とUIFAが一体となるよううまく配慮されていました。また、作品展示会場は美しく、一般の人々が親しみやすいように考えられており、大きな展示効果が得られたと思います。

一つだけ残念だったのは、ポストコンgressツアーに参加できなかったことです。

私はこの一文を書きながら、いつか韓国でUIFA国際会議を開こう、そのために私のベストを尽くそうと心に決めました。

(訳 田中厚子)

* ベーさんは現在、軽量鉄骨フレーム・システムをチャイルド・ケア・センター施設の環境改善のために取り入れるという大きなリサーチ・プロジェクトを請け負っていらっしゃるそうです。もし、日本で、鉄骨造のチャイルド・ケア・センターについて何か情報や例がありましたら、この夏に見学したいので教えてください、というお願いがありました。ご存知の方は編集部までご連絡ください。

鉛色の村—プロローグ

佐藤 久美子



建築・設計 ㈱ムサシ企画勤務。喜多方の煉瓦職人・田中又一の孫。日本大会では「地方都市における煉瓦建築物の保存と再生」をテーマに発表。

昨年のUIFA日本大会で、喜多方の煉瓦蔵を紹介することが出来たことは私にとって大きな喜びでした。十数年程かけてコツコツ取り組んできたテーマだったからです。大好きな煉瓦の話をもう少し聞いていただきたいと思えます。今でこそ煉瓦蔵はメジャーになりましたが、当時の喜多方はラーメンの方が有名で、蔵は観光のおまけ程度の存在でした。むろん煉瓦蔵も例外ではなく、町の人にとって蔵は、風のように、空気のように、当たり前前の風景でした。当たり前すぎて、当時の市長は「蔵は



写真左 甲斐本店倉庫落成 明治 45 年撮影
現在、この 2 軒のバルコニーと全面の門扉部分は残っていない。煉瓦はイギリス積みで積まれている。初めてみるハイカラな建物に、落成後は毎日のように、近隣の村々から人々が見学に訪れた。

町のイメージを暗くする。あんな物は壊してしまえ」とさえ言っていた位でした。時がたち、町の人々の努力のかけあって、今や蔵は観光の主力となり得ました。特に煉瓦蔵は喜多方観光のメインとして観光パンフレットのトップを飾るまでになりました。実はこのパンフレットこそが、ことの起こりでありました。

母と二人で始めた煉瓦蔵の保存運動

十数年前、お盆で帰省していた時の事です。駅前で何気なく貰ったパンフレットを見ると、「煉瓦蔵はドイツ人が来て建てた云々」という文字が飛び込んできました。もちろん、私達身内は田中又一の遺した仕事であることを知っていましたが、町の人にとって煉瓦蔵の創製はあまりに遠い昔のことでした。ですから納得しやすかったのでしょうか、いつしかドイツ人説が流れるようになっていました。が、まさか公式文書にこんなに堂々と、それも英訳付で書かれるとは。驚いた私は夢中で家に戻り、母にパンフレットを見せました。似た者親子というのでしょうか、話をしているうちに「捨ててはおけない！」ということになり、どちらが言い出すともなく「行くべ！ 行くべ！」と言いながら、市役所の観光課にすっ飛んで行きました。これが、母と私がたった二人で「煉瓦蔵の価値をまず、町の人に知ってもらう運動」を始めるきっかけとなったわけです。田中又一が埋もれてしまう危機感もありました。

それからの私は季節ごとに喜多方に足を向け、写真を撮りため、聞き取り調査を積み重ねました。しかし、当時施主だった方が二代前という方ばかりで、はっきりとしたことをつかむのは容易ではありませんでした。こんな事なら又一が生きている内に聞いておくのだったと、

写真下 慶徳隧道工事
大正 7 年 6 月 7 日竣工、12 日開通。右端に白いパラソルをさしたり、赤ん坊を抱いている日本髪の女性がいる。工事に携わる女性も日本髪だった。皆わらじを履いている。煉瓦は麓の松野の村から背負い子で担ぎ上げられた。煉瓦の重さは 1 個 3 キロ程で、男の力でも 1 回に 20 個、女性は 15 個運ぶのがやっとだった。

何度悔しい思いをしたことか。しかし、嬉しいことにどの家でも煉瓦蔵は愛着を持って使われていました。五十嵐家の厩蔵などは近代化をとげ、水洗になっていました。三津谷の農具蔵は、観光客相手の土産物屋やラーメン屋に生まれ変わり、甲斐商店は喫茶店に、若喜家の座敷蔵は観光客が外からのぞけるよう整備され、まるで博物館のごとです。金田家の店舗蔵は昔どおりのたたずまいを保ちながらも木製ひき戸をサッシに変えました。このように生まれ変わらないまでも、多くの煉瓦蔵は建った当時そのままに、座敷蔵、道具蔵として今でも使われています。

喜多方の人々の蔵に抱く思い

蔵は生活の場であり、外からかいま見ることしか出来ないのは残念ですが、暮らしを支えるものであることが、壊されずに残っていた理由でもあります。もう一つの理由は、喜多方の人の信仰とも文化ともいえる「蔵に抱く思い」です。全ての基本に蔵があり、何事も、たとえばことわざさえも蔵に結びつけるのです。この蔵信仰とも言える文化が、逆に言えば先祖伝来の蔵を壊すなどもつ



UIFA JAPON 事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5
麹町E・C・Kビル (株)生活構造研究所内
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866

てのほかといった、いわば、自然発生的保存運動でもありました。

人々にとって蔵は、補修して大切に使うものでした。したがって増え続ける一方で、今や2,800棟といわれています。煉瓦蔵はおよそ80棟、明治末期から大正、昭和初期にかけて建てられました。壁が厚く、開口部を大きくとれないことなど、まさに煉瓦は蔵造りにぴったりの素材でした。多雪地帯であることからの問題点も、独特の手法である木骨煉瓦造にし、釉薬煉瓦を造ることで解決し、人々に受け入れられていきました。釉薬煉瓦は土蔵の補修にも使われ、この、いわゆる腰煉瓦は町中いたるところで見られます。これも入れれば、どれほど多くの煉瓦が使われたのかと驚き、改めて喜多方が煉瓦の町であることを実感します。

皆様にも、ぜひ、長い年月と愛着が滲みだした深い色合いを味わっていただきたく、母と共に飴色の村にてお待ち申し上げます。

■7月31日 海外交流会 ご参加下さい！

1999年度第1回海外交流会

「国境をこえて一みかんぐみの設計作法と建築」
—みかんぐみ マニユエル・タルディッツさんのお話—

日 時:7月31日(土)14:00~16:00
場 所:国立オリンピック記念青少年総合センター棟
414号会議室 TEL 03-3467-7201
問合わせ:UIFA JAPON事務局
生活構造研究所内 TEL 03-5275-7861

■役員会報告

第3回 6月18日(金)

出席者:小川、東、松川、正宗、山田、吉田(あ)、吉田(洋)、渡辺

- ・5月31日、日本大会の寄付金、助成金は全て入金された。
- ・今年度の海外交流会の講師の検討。
- ・ニューズレター編集用Eメールの枝番を生活構造研究所でとってもらうことに決定。
- ・ニューズレターの「この指とまれ」の欄には自由な提案をのせ、会の活性化を図る。予算化については年度末に理事会で協議。

第4回 7月5日(月)

出席者:中原、小川、松川、山田、渡辺、正宗、東

- ・今年度海外交流会の会予定

第1回 7月31日(土)

マニユエル・タルディッツ氏

「国境をこえて一みかんぐみの設計作法と建築」

第2回 10月30日(土)

小澤紀美子氏他

「子どもと環境教育について」(未定)

第3回 1~3月 未定

- ・10月の交流会については、千代田区の共催事業に申請してみる。

■この指止まれ—「喜多方押し掛けワークショップ」

喜多方の煉瓦師・田中又一とその弟子たちが手掛けた煉瓦蔵。又一の娘と孫、佐藤さん母子の飴色の煉瓦村への熱い思い。お誘い有り難く、早速喜多方への旅を企画いたします。名付けて「喜多方押し掛けワークショップ」。様々な生活蔵、道具蔵をこの目で見、地元の人たちと蔵について語らう会を考えています。土地っ子の市長さんも参加して下さるかも知れません。

開催時期は、8月の最終土曜日(28日)を予定しています。近くには、昔ながらの熱塩温泉(エステ効果大…)があり、一泊するのも良いかも知れません。

参加を希望する方には、詳細が決まり次第、案内書をお送りします。予め、下記宛にご連絡下さい。

連絡先:(株)日建設計東京計画事務所 飯島静江
TEL 03-3813-3361, FAX 03-3817-0523
Email:iiijima@nikken.co.jp

<お知らせ>

■UIFA JAPON の E メールが開設されました。どなたでもお気軽にご意見をお寄せ下さい。

メールアドレス uifa@magical3.egg.or.jp

■広報だより

今回の号から編集体制が新しくなりました。新たな広報編集委員からのひと言です。

*喜多方行き、実り多き仕掛け目下思案中。(飯島静江)*あの暑い2週間の続きをやらうとしています。よろしく。(井出幸子)*会社の広報誌でも追われています。(今村芳恵)*月

1度の編集会議にぜひご参加下さい。(大高真紀子)*メンバーの幅が広く、載せたい情報がいっぱいです。(須永淑子)*海外への原稿依頼を始めました。ぜひこの方というご希望を含め、皆様の声を編集部までお寄せ下さい。(田中厚子)*新体制に皆様のご協力を!(渡辺喜代美)